

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目 日本<sup>の</sup>国語教育における五十音図の役割  
—シンハラ語ホーディヤとの比較対照—

氏 名 ATTANAYAKE Priyanthika

## 論 文 内 容 の 要 旨

本研究は日本語の五十音図について近代国語教育での役割を解明し、併せて歴史的な観点からシンハラ語の音図（ホーディヤ）との対照を行うものである。五十音図の歴史的な研究といえ、馬淵和夫（1993）の『五十音図の話』が重要である。馬淵（1993）では、日本語の「五十音図」がインド音声学「悉曇学」の影響を受けて作られたことを明らかにしている。同様にスリランカのホーディヤがインド音声学「悉曇学」（古代サンスクリット語）の影響を受けていることもすでに明らかになっている。シンハラ語は時代とともに変化してきたが、言語学ではシンハラ語の元になったのはパーリ語とサンスクリット語であると考えられている。

シンハラ語のホーディヤと比較すると日本語の五十音図は現代国語教育において重大な役割を果たしている。しかし、日本語の五十音図が国語教育史上いかにその位置づけを変化させてきたかについては、これまで教育史においても日本語学説史においても具体的な考察がなされていない。明治4年に文部省が設置され、それまでにあった寺子屋などの民間教育が再編成された。教科課程として全国的に統一された基準が実施されたことで国語教育の重要性が高まったことを受けて、この時期に五十音図が教育に導入されたと推察できる。五十音図の位置づけはいろは歌との関連のみならず初等国語教育・国語国字問題についての議論と関わりつつ、仮名遣い・平仮名・片仮名の導入順などに関連して変化する。よって本研究では、「平仮名・片仮名」「いろは歌」「仮名遣い」などに注目して五十音図の位置づけを明らかにしていく。

第一章では、日本語の五十音図とシンハラ語のホーディヤの歴史について先行研究に基づき整理を行い、比較対照を行った。その結果、サンスクリット語音声学を元に作られた五十音図とホーディヤの子音配列は非常に似ているが、五十音図では〔サ〕がホーディヤの〔ca〕の位置に、〔ハ〕が〔pa〕の位置に来ている点が異なっていることについて確認できた。その点に関する歴史を調査すると、ホーディヤがサンスク

リット語の音声学をそのままなぞっているのに対して五十音図は漢字音韻学とサンスクリット語音声学の音声原理を受け入れていると結論づけられる。また、ホーディヤが子音（音素）を音声学的に配列するものである一方、五十音図は同じサンスクリット語由来の音声学的秩序に基づきながらも日本語で使用されている音（音節）を配置したものであるため、この点で両者に違いができるのである。また、五十音図はサンスクリット語の配列を参考にして作られたためにホーディヤと似ている点があるものの、条件異音や濁音、半濁音や拗音などを考慮に入れてないため、ホーディヤと比べ、音声的な秩序は未完成なものになっているといえる。

第二章では、五十音図とホーディヤを両国の国語教育において就学時からどのように習い、どのように把握していくかについて整理した。その結果、日本の初等教育では使用する教科書により内容が部分的に異なる点もあるが、一般的にどの教科書でも小学校で五十音図を使用し仮名文字（片仮名と平仮名）の学習を終わらせた後に五十音図によって日本語のすべての音韻体系や音韻構造を学習するところが共通していることが分かった。スリランカではグレード1から11まで学年とともにホーディヤについて学んでいき、その符号や気音文字なども学習する。日本の高校に当たるグレード11になるとシンハラ語のホーディヤの歴史についてはインドの音声学の影響を受けて作られたことも把握できる状態になっている。また、日本語教育でいかに五十音図を利用しているかについても考察した。日本語の五十音図が国語教育で重要な役割を果たしているのに対して日本語教育では五十音図を国語教育ほど重視していない。外国人の日本語学習者は日本語の発音のみ五十音図で学習し、文法の説明にはほとんど用いていないことが分かった。

第三章では現代初等国語教育で大きな役割を果たしている五十音図が歴史上どのような経緯をたどって導入されたかについて確認するために近代国語教育の歴史的背景を見た。明治期の初等国語教科書に焦点を当て、五十音図が国語教育でどのような役割を果たしているのかについて考察した結果、歴史的にいろは歌を出発点とした初等国語教育が明治十九年に湯本武比古によって編集された『読書入門』によって大きな変化を遂げたことが分かった。明治初年から十九年までは、初等国語教育においては平仮名を和語に用い、音声の表示を目的とした際に片仮名を象徴的に用いるという区別をしていたが、明治十九年以降は全て片仮名によって学習するようになり、初等国語教育は「音声」中心の教育に展開したといえる。その背景にはドイツの初等教育における教授法の影響がある。また、『読書入門』の編集に関わった教育学者について調べたところ、彼らが一定した教育方針がなかった日本初等国語教育に新たな方針を立てる立場にあったこと、近代国家の国語（標準語）教育」に関して重要な役割を担う学校教育の中で初等国語教育が極めて重要であるということから音声を重視した「片仮名先習」という教育方針を目指していたことが彼らの経験からもわかった。

第四章では明治期の仮名遣いに関する過程をみた結果、当時において国語学はまだ発展段階にあり標準語や表音的仮名遣いに関する研究もなかったため、歴史的に使用されてきた仮名遣いがあるまま国語教科書に取り入れられていた点を確認した。また、新定仮名遣いについて明治三十三年からの高等師範学校の仮名遣い調査、明治三十五年の国語調査委員会への諮問を経て、明治三十八年における文部省の仮名遣い諮問案とその答申、臨時仮名遣い、調査委員会による仮名遣い案の諮問などについて検討した。文部省は明治三十三年小学校令施行規則で、小学教育に表音的な仮名遣いを実施した。これが仮名遣い問題上画期的なことで、これを機に新字音仮名遣いが実施され、また実施に際した対策を立てる時代となったことが分かった。

第五章では、第三期以降の国定国語教科書を参照した。第三期国定国語教科書から第五期国定国語教科書までは第三章で見た検定制度期以来の国語初等学習方針を受けついでいるといえる。第六期国定国語教科書からは「平仮名先習」という教育方針になった。これを踏まえ、その歴史的な背景や社会的な背景についての考察を行った。明治十九年から「片仮名先習」としてきた国語教育が一変して「平仮名先習」となった大きな理由として戦後に定められた正字法があることは先行研究で明らかにされている。戦後になって法律が口語化し漢字平仮名交じり文に改められ、この社会的な影響が国語教育にまで及び、初等国語教育が片仮名先習から平仮名先習に展開した点について確認した。このことによって発音と記述法がことなる歴史的仮名遣いと深い関係を持つ「いろは歌」を国語教育から削除し、清音、濁音の区別が明確な「平仮名の五十音図」がよく扱われるようになったともいえる。

本研究では、日本語の五十音図とシンハラ語のホーディヤはどちらも古代インド音韻学がもとになって作られているが、五十音図のほうがホーディヤよりも音韻学・文法学から国語教育に至るまで幅広い範囲で重要な役割を果たしている。音図の比較対照という観点から日本語の五十音図を評価することができる点は本研究の成果であると言えよう。

以上の構成によって詳細で説得的な比較対照研究をまとめ、国語教育における音図の役割を明らかにした。さらに、五十音図の日本語教育、教授法への活用の可能性についても考察する必要があると考えている。筆者は日本語学習者に効率的かつ効果的に指導できる音声教材の開発について課題として関心を持っている。音声音節把握と教育の関係を明らかにする研究の成果を活かし、初級・中級及び上級にいたる日本語教材の開発に貢献することで、日本語教育の発展に寄与できると考えている。